

文化・芸術

名画の扉

「松本俊介『街』と昭和モダン」から

1923年の関東大震災後、昭和に入るまで未開発だった土地が整備され、都心から人々が移り住むようになります。郊外の家の庭は日常生活と自然との接点になり、洋画家にとって、絵の題材となりました。

木村荘八は東京・日本橋に生まれ、画家を志して白馬会の葵橋の洋画研究所で学び、岸田劉生と出会いました。12年には青年画家たちとヒュウザン会の結成に参加。15年には劉生を中心とした草堂社を結成しました。春陽会に招かれて以降、会員として会の発展に尽力

ます。本作は、東京の本郷から郊外だった現在の杉並区に転居したころの一点。地面から空を覆うほどに濃く茂る緑の中に、アサガオが親しみをじませて頭をもたげています。

(大谷)

「朝顔」

1939年、油彩、キャンバス

木村荘八

(1893~1958年)

